

ノヴァーリスの「断章」とは何か ——記述しないものを記述する——

独文学 博士後期課程二年

大澤 遼 可

この度はこのような栄誉ある賞を賜りましたこと、大変光栄に思います。ご関係者の皆様およびご指導くださった先生方に心より御礼申し上げます。

私が研究の主題として取り組んで参りましたのは、ドイツ・ロマン派の詩人ノヴァーリスの世界文学の試みです。ゲー

テが初めて用いた世界文学という語は、国民文学の特殊性を深化させ、普遍性を引き出した超国民的文学を意味し、さらにノヴァーリスにおいてその意味は拡大され、一切を網羅した百科全書的記述をも含むようになります。

ノヴァーリスの詩学においてその思想的背景にあるのは、次のような歴史的三段階です。すなわち、いつさいの現象が「精神の顕現」と見なされたかつての「黄金時代」、そして「世界」と「精神」との連関が消失し、その結果「世界の意味」が失われた現在、最後に、「世界の意味」が再び回復する「来たるべき黄金時代」です。ノヴァーリスの目指す「精神の顕現」たる「世界」とは死せる事物の集合体でなく、無限の生成にある動的なものです。「世界」をそのように記述するに際し、それは対象の固定化であつてはなりません。ノヴァーリスにおいていかにしてそれがなされるのか、それを有機的および青というキーワードから論じる点が本研究の特色です。

ノヴァーリスの有機的記述を読み解く

に際し、彼が特に重視した百科全書、断章、詩という三つの方法を抽出し、それらの有機物との親縁性を分析しました。彼の百科全書的記述では、私たちが見慣れた百科全書とは異なり、諸事項が思想的に伸び広がるように記載され、すべてが連関のうちに置かれます。それはまるで無限に生成していく植物を想起させます。そして彼の断章集においては、その全体が目指す思考の方向性が示されるのみで、論理的な一貫性はありません。断章を作る行為を「種まき」に例えるノヴァーリスにとり、一見すると固定的に見えるそれぞれの断章は、しかし同時にある方向性を持ち無限の変容を見せる種子でした。さらに「真に詩的なものは有機的で生きたもの」だと述べる彼にとって、詩とは何か特定の形式や音韻に即したのではなく、動的な世界をそのように記述する生きたものでした。これらの意味で、ノヴァーリスの書物は有機的性質を持つと言えます。

そしてノヴァーリスは、志向の対象である「精神」や神的な領域を「青」の色

彩でイメージしていました。詩『夜の讃歌』(二八〇〇)や小説『青い花』(二八〇二)等にそうしたイメージが度々登場します。しかし、ノヴァーリスにおいてこの青という色彩が持つ意味が明確に語られることはありません。今後もノヴァーリスの詩学と、青という色彩の関わりについて、ゲーテの色彩論やニュートンの光学とも関わる自然科学的側面、そして「曖昧な・つかみどころのない」といったドイツ語における意味的側面、さらに哲学や宗教的背景も加味しながら多角的に研究を進めていく展望です。